農耕の技術と文化

『農耕の技術と文化』31 (2022): 1–14

《研究ノート》

稲作の天水農耕地帯への波及
―― 中国の新石器時代から古代王朝までを概観して ――

池橋　宏*

The Role of Rice Cultivation for the Development of Ancient Kingdoms in China:
Discussion with Archeological Evidence in China

Hiroshi Ikehashi

要旨

今世紀に入り洛陽郊外の二里頭の夏の王都とされる遺跡からかなりの量の米が出土し、またこの遺跡に隣接する殷の偃師商城の祭祀遺跡から大量の炭化米が出た。これらの知見により、黄河流域に栄えた古代の王朝の地域では主にアワやキビなどの天水農耕が行われていたとする従来の見方には再検討の余地があろう。ここでは中国語で出版された、淮河上流域や漢水上流域の考古学的研究、および山東省で発達した大汶口文化の晩期の西方への展開などの報告も参照し、水田稲作が新石器時代の晩期からアワやキビの農耕地域へ波及したことを示す記事に注目した。さらに、稲作を基礎とする良渚文化の大汶口文化への影響、大汶口文化の竜山文化への発展、および良渚文化の夏王朝への影響をたどり、これらの歴史の背景にあった淮河中・下流域の可住地の拡大と水田稲作の役割に注目した。そして稲作の波及は古代王朝の成立にも寄与した一要因であったと考察した。

キーワード

水田稲作、中国考古学、中国の新石器時代、竜山文化、中国古代王朝

はじめに

最近では各地域の多様な新石器時代文化が記述されるようになったが、これまでの一般的な中国先史時代の説明では、彩陶の仰韶文化から黒陶の竜山文化へと進み、殷王朝に至る歴史が、キビやアワの天水農耕を基礎とする「中原」の黄河文明を舞台として記述された。「中原では天水農耕」という教科書

*hiro-i@feel.ocn.ne.jp

的な筋書きに従って著者は『稲作の起源』を発表し、その中で中国の長江以南の農耕と歴史を調べ、戦国時代（BC403 年 –BC221 年）からの呉越の興隆の基礎に稲作農業の潜在力があったことを考察した（池橋 2005）。その後さらに中国関係の資料を調べ、殷時代の水稲農業の重要性について本誌に発表した（池橋 2019）。

このような視点から現在出版されている資料を見ると、稲は熱帯由来であるという見方が主流であり、また中国考古学を専門にする学者の視野では稲作は重要でないので、稲作農業に注目してきた著者には隔靴掻痒の感があった。それで非力を顧みず、良渚の遺跡や「夏」の王朝の遺跡などについて中国語で書かれた資料の読解に取り掛かった。それとともに中国の著名な遺跡の地理学的な立地を観察した。その結果、改めて水田農業の役割に注目することになった。

紀元前 5000 年以上に遡る中国の新石器時代から「夏」および「殷」など青銅器時代の王朝に至るまでの歴史を概観するには大部の記述が必要である。そのため著者は一度覚書を作成したが、ここではそれを紙数の限られた要約という形でまとめてみた。このため議論の拠り所については、資料内容を詳しくは紹介せず、引用文献として参照できる形にした。政治・文化史の記述は、中国史の概説書に譲り、ここでは、歴史の背後にあった農業、とくに水田稲作の面に注目して、その歴史上の役割を考察する。そのためには、史学上は問題のある伝承についても、夏と東夷圏との交渉など参考になるものは取り入れた。ここでの記述は、中国の歴史と地理学へのある程度の知識を持つ読者を対象とせざるを得ないが、境界を広げてみると理解を深める面もあるので農学の枠を超えたところもある。一見すると中国の新石器時代の話は、現代の農学の課題とはかけ離れているが、中国の先史時代から王朝の成立にいたる社会をたどり、それが天水農耕地帯への稲作の波及と関係があるかどうかを検討することは、現代の稲作の農業上の潜在力を理解することとも関係があるといえよう。

なお、本文中に入れた写真はすべて著者が撮影したもので、文章を読みやすくするため挿入した。

1. 裴李崗文化と仰韶文化――新石器時代文化の発展と農耕 (1)――

新石器時代の中期から竜山文化に至る各地域の文化と年代区分を表 1 に示した。この表の大枠は張弛（2003: 242）による長江中・下流域の新石器時代の文化区分による。以下の記述では稲作を基礎とする文化の動向に注目するため、黄河中流域については、王小慶（2003）により付加し、黄河下流域については高広仁･欒豊実（2004）によって付加した。これら二著が示す年代は長江流域を主とする大枠に、必ずしも一致するものではないが、ここでは、概略を示す目的で、まとめて示した。この表中の各文化の特徴は、表に書き入れることは難しいので、本文中で順を追って説明する。

新石器時代の中期の文化は、紀元前 7000 ～ 5000 年前に各地域に見られた。その中で農耕の歴史を見る立場からは次の三地域が重要である。①黄河流域の裴李崗文化、関中地域の仰韶（ヤンシャオ）文化に先行する老官台文化などがある。②長江中流域では、洞庭湖の西北を中心に城背溪文化が、下流域では太湖に近い馬家浜文化が知られている。③いま一つ、山東省を中心とする大汶口文化の前身の北辛文化がある。

仰韶文化に先行する黄河流域の遺跡は、実際には黄河から離れた淮河の上流域などにある。家族単位の小さな家屋が 10 戸程度まとまった集落があった。その例には、裴李崗遺跡などがある。当時の人々はアワとキビを栽培し、耕作具とされる石鏟（手スキ）を使い、磨棒と磨盤で収穫物を粉砕し、粉食したことがわかる（河南博物院 2009）。石鏟、磨棒および磨盤は、河南省の淮河上流域の登封市の博物館でもかなりの数が展示されていた。注目すべきことに、河南省の中南部の、後に淮河に合流する沙河流

表1　新石器時代から竜山文化にいたる年表

年代	新石器時代	地域			黄河流域	
		湖北－湖南	漢水中流域	江蘇－浙江	中流域	下流域
BC10000～	早期	玉蟾岩遺跡				
BC7000～	中期	城背溪文化 （彭頭山文化）	裴李崗文化		裴李崗文化 （老官台文化）	北辛文化
BC5000～	晩期 前段	大溪文化早期 大溪文化中期 大溪文化晩期	仰韶文化早期 仰韶文化中期 仰韶文化晩期	河姆渡文化 馬家浜文化 崧沢文化早期 崧沢文化晩期	仰韶文化期	大汶口文化早期
BC3500～	晩期 後段	屈家嶺文化 石家河文化早期 石家河文化中期	屈家嶺文化 石家河文化早期 石家河文化中期	良渚文化早期 良渚文化中期 良渚文化晩期	廟底溝二期文化	大汶口文化中期 大汶口文化晩期
BC2500～	末期	石家河文化晩期	石家河文化晩期		竜山文化	山東竜山文化

時代区分の大枠は張弛（2003: 242）による。黄河中流域は王小慶（2003: 19）による。黄河下流域は高広仁・欒豊実（2004: 76-78）による。

域の賈湖遺跡では、磨棒と磨盤が炭化米と一緒に出土している（黄強 1996: 35-64）。長江流域の最古の稲作遺跡では、どこにも磨棒と磨盤はなく、炊器がある（張弛 2003）。もし賈湖遺跡の住民が原初から稲作を行っていたら、磨棒と磨盤はなかったと思われる。著者は 2010 年 6 月賈湖遺跡を見た。ここは裴李崗遺跡に近いので、磨棒と磨盤を使用したアワやキビの農耕があり、その中へ後から稲が導入されたと考えられた。ここには地名から想像されるように池沼があった。淮河流域は、洛陽のある「中原」と長江流域の呉越を結ぶ重要な通路であった。図 1 に淮河中流域の景観を示した。現在ここは稲作地域である（図 1）。

彩陶の意匠や分布からわかるように、仰韶文化は、早くから高い水準をしめし、広い地域に影響したとみられる。仰韶文化の集落では、環濠はあったが、墓地の階層分化はほとんど見られなかった。集落は 20 ～ 30 の家族単位の小さな家屋と、広場にあるやや大きな建物からなっていた。西安市の東北の郊外にある半坡遺跡は、現在博物館として保存され、仰韶文化の住居や農具の石鏟などがみられる。仰韶文化の中心の関中地域（陝西省）では、気候は温暖で、中期にはかなり人口が増加したが、その後期になっても発達した大集落は見られなかった（王小慶 2003）。一方、河南省の西北部の鄭州郊外の西坡遺跡などで、仰韶文化の中期から後期に属する大型建築や城壁をもつ集落が見られ、首領を示す斧鉞が副葬された墓地が出土した（蘇湲 2007b: 57）。

天水農耕による仰韶文化は、紀元前 3000 年頃には衰退したとみられる。黄土地帯に特有の土壌侵蝕、人口増加による植生の衰退、気候変動による干ばつなどが原因と考えられる（蘇湲 2007b: 48）。仰韶文化に稲作は確実にあった（王小慶 2003: 210）。仰韶遺跡の発見者、アンダーソン自身が故国の植物学者と協力して、稲の遺物を確認した（アンダーソン 1950）。しかし、黄土地帯では雨量は少なく、稲作の適地は少ない。年によっては、雨水による浸食は激しく、黄土の畦畔は不安定で、稲作は拡大しなかったと見られる。後述するように、仰韶文化のあとに見られた廟底溝二期文化には、墓制や器物に東の大汶口文化からの影響がみられ、それが次の時代の竜山文化に接続している（王小慶 2003: 209）。

図1　河南省信陽市北東郊外の淮河本流

親子の水牛を水浴に連れ出す農村婦人（2010年6月5日）。淮河は中原と呉越を結ぶ交通の要であった。

2. 稲作から始まった長江流域の社会と小国――新石器時代文化の発展と農耕（2）――

現在多年生の野生稲は珠江デルタには多い。それが栽培稲の先祖とみられている（Huang et al. 2012）。この地方以外では、現在湖南省茶陵県と江西省東郷県に野生稲がわずかに残っている（呉妙燊 1990）。

長江中流域では、新石器時代中期（紀元前 7000 年～前 5000 年）に、「城背溪文化」あるいは「彭頭山文化」が確認された。それらの最早年代は紀元前 7000 年に接近し、北方のアワ・キビ農耕の裴李崗文化に相当する（表 1）。洞庭湖の西北方の湖南省澧県にある当時の八十壇遺跡から大量の植物種実、動物の頭骨、および土器、骨、木、竹の残器が出土し、大量の稲の葉、稲穀と米が出土した（張弛 2003: 15）。

新石器時代の中期のあと、紀元前 5000 年から前 3500 年には長江中流域に「大溪文化」と名付けられる文化が発展した。その年代は中原では仰韶文化期に相当する（表 1）。この文化の初期の遺跡には、もみ殻や水田址が見られた。一つの建物をいくつかに仕切った長屋式の家屋と、一つの共同の建物からなる集落があり、水路に通ずる環濠で囲まれていた。一部には発達した祭壇や大墓をもつ環濠集落があった（張弛 2003）。

この地域では大溪文化の 1500 年間の後、紀元前 3500 年から前 2500 年の 1000 年間に屈家嶺文化から石家河文化の早期と中期が続いた（表 1）。これらを通算して、同じような文化が 2500 年ほど続いた。河川に臨む丘陵の端に、多くは低地の土を盛りあげて、堰堤と環濠を築いた大小の集落が、長期にわたって継続した。その中で大集落が見られるようになったが、墓の制度や集落の形には大きな変化は見られなかった。一部に、祭壇や区画された墓地などをもつ城のような集落があった。集落では、小さな土器のかまどを始め、石器の多様な道具から、装身具まで生産されていた（張弛 2003: 170）。

ここで注目されるのは、河南省の西部から陝西省南部に及ぶ漢水の上流域では、屈家嶺文化の時期に仰韶文化から、稲作の集落に変わったことである。一例として、湖北省鄖県の青竜泉遺跡では下層は仰韶文化、上部は屈家嶺文化早期と晩期がみられ、「青竜泉三期文化」とされた（張弛 2003: 206）。別の著書では、屈家嶺文化が、晩期になると、河南省南陽盆地、中原の洛陽王湾と鄭州大河村など、仰韶文化の領域に拡大したと指摘されている（張江凱・魏峻 2004: 155）。このような見方は伝統的な「中原先行論」の反省と関連している。この著者らは、石家河遺跡の西北部の鄧家湾遺跡から黄銅が出土したことをあげて、この文化が竜山文化に接続した可能性を述べている。

長江の下流域から、太湖を囲む低湿地帯では、紀元前 5000 年の北方の裴李崗遺跡とほぼ同じ時代に、水田稲作を基礎とした河姆渡遺跡や馬家浜文化の遺跡が見られた（張弛 2003）。長い建物を仕切った長屋式の建物、あるいは独立のいくつかの小家屋と一つのやや大型の建物をもつ集落があった。小型のかまどを始め、足付の皿（豆）など各種の土器があり、多様な木製品があった。すでに玉製品が作られていた。また水牛の家畜化への一歩が踏み出されたとみられる（朱金坤 2010b）。

江蘇省の昆山綽墩遺址から馬家浜文化時期の 24 区画の水稲田およびそれに配置された水溝と畜水坑等の灌漑系統が出土した。水田の形状は円角長方形、長条形などで、面積 1 ～ 16m^2 で、水田と結ばれた三条の排水溝があり、別に 4 個の不規則形あるいは円形の蓄水坑があった（朱金坤 2010b: 28）。

馬家浜文化の時代に次ぐ、崧沢（スウタク）文化の時代になると、土を盛り上げた土墩（ドトン）墓地が見られ、階層による墓の違いが明らかになった（張弛 2003）。江蘇省の呉県澄湖角直（ロクチョク）区域の湖底から崧沢文化晩期の 20 区画の水田遺構が出土し、周囲に貯水池、水溝等の灌漑施設、田の間に水口と水路が通じていた（朱金坤 2010b: 28）。

紀元前 3500 年から前 2500 年にかけての良渚文化（張弛 2003）は、太湖周辺のいくつかの中心で発達したが、その中で、今の杭州市の北方郊外にあたる良渚地域で、多くの集落群が見られた。その中心には人工的な広大な壇である莫角山を中心に、およそ東西 1.6km、南北 1.8km の城壁をもつ、宮殿のような区画があった（図 2）。高度に彫琢された玉製品や特別の墓地などからみて、貴族的な支配層が統治する小国があったとみられる。支配的な貴族の墓から、人と獣の姿から抽象化された“神徽”が刻まれた玉琮が出土した。その意匠は、後世の殷周時代の器物に刻まれた饕餮（トウテツ）紋に引き継がれた（朱金坤 2010a: 203）。

良渚文化には、絹織物、黒色光沢の土器製品、漆塗に玉をはめた高い盃など、高度の手工芸製品があった。良渚文化に先行する時代から玉製品の加工では、この地域が中心であったが、その伝統は夏王朝にも色濃く引き継がれた。一方、櫂の遺物から見て、舟運が盛んであった。また長大な堰堤や灌漑水路などの工事も行われた。器物の証拠から、良渚文化の時代の最盛期には、北に隣接する山東省を中心とする大汶口文化の地域への進出があった（高広仁・欒豊実 2004: 158）。

良渚文化の遺跡から、木製の犂の上面の先端と両側に石板を打ち付けた犂が出土し、犂耕の証拠とされている（朱金坤 2010b: 22）。ただしこの低湿地帯では後世でも犂耕は行われていない（游修齢・曽雄生 2010: 239）。一方、半月型の石板は「耘田器」とされていたが、実は穂摘器であることが確認された（原田 2009）。農耕具の解釈にはなお問題がある。

太湖周辺の良渚文化とほとんど平行していた長江中流域の石家河文化は、同じく水田稲作を基礎とする社会であったが、集落や墓地の状況などには大きな変化はなかった（張弛 2003）。この点で小国の形成にまで至った良渚文化の社会と対照的である。おそらく石家河文化の地域が広大な湿地帯にあり、洪水などの被害にさらされていたことは、その停滞性に関係があっただろう。ただし石家河文化の鄧家湾遺跡などは、竜山文化の時期まで継続し、河南省まで影響を及ぼしたとみる見解がある（張江凱・魏峻

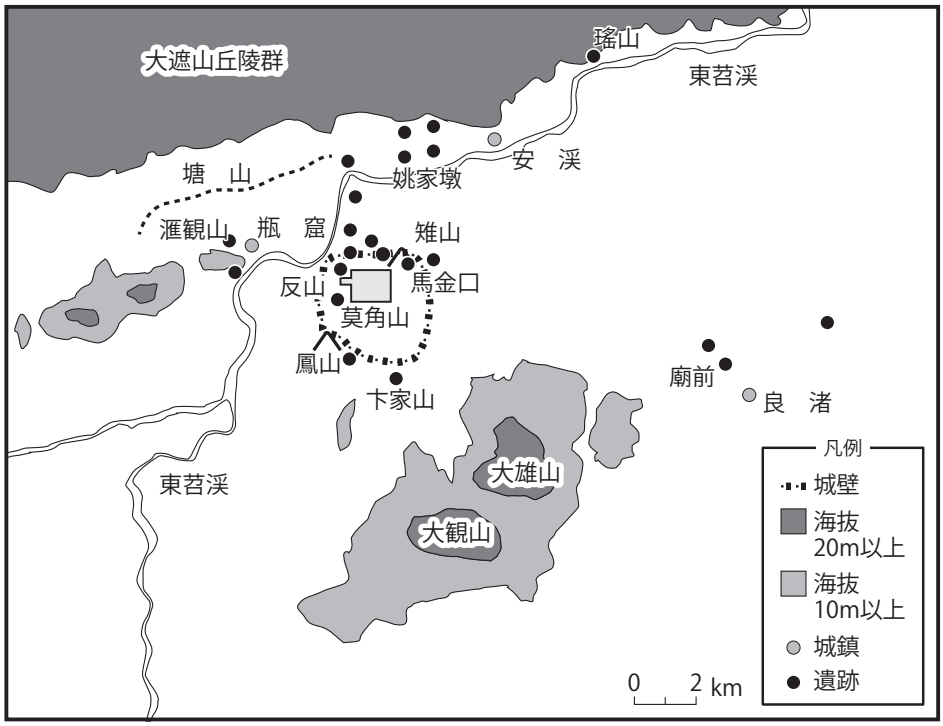

図2　良渚遺跡群と莫角山の城壁

朱金坤（2010a: 135）、張弛（2003: 177）をもとに加筆・補足。

2004）。一方、良渚文化の地域は、低い山地や丘陵に三面を囲まれた比較的に閉鎖的な環境で、集落群が集積し社会の統合性が維持されたので、面積当たりで高く安定した生産をあげる稲作を基礎に「小国」の発展にまで至ったとみられる。

3. 大汶口文化から竜山文化へ――新石器時代文化の発展と農耕（3）――

山東省を中心に発展した大汶口文化（図 3）は、およそ紀元前 4000 年から前 2500 年まで存続した。それは、南に隣接する地域の良渚文化に先行する崧沢文化の時期から始まり、良渚文化の終わりの時代まで続いた。大汶口文化の地域でこれに先行する北辛文化は、河南省北部の最古の農耕文化である、裴李崗文化と平行している（高広仁・欒豊実 2004）。

以下の記述は高広仁・欒豊実（2004）による。先行する裴李崗文化や北辛文化と同じく、大汶口文化では主にアワとキビを栽培し、磨盤と磨棒で収穫物を加工していた。一方、大汶口文化の地域（図 3）では、北辛文化期から稲作遺跡があり（黄強 1996: 35）、後述のように、大汶口文化の中期からは、比較的温暖な湖沼の多い環境で稲作と漁撈が拡大したと思われる。

大汶口文化の集落の遺跡は少ないが、仰韶文化などで見られるように、個別のごく小さい家屋と一つの共同体用の建物をもつ集落が一般的であった。図 3 の河畔には、住居遺跡が展示されていた。早期には、余り格差のない共同体の墓地が見られたが、中期から、墓地の格差が拡大され、後期には、木製の棺と外側の囲いを持つ大墓が出現した。家畜などを象形した複雑な形の土器が盛んに生産され、また動

図3　大汶口文化の命名由来となった大汶河と遺跡博物館

大汶河は山東山地の南麓を西流し、大汶口を経て北東に向かい、黄河に近い東平湖に流入する。上流に向かい西岸を撮影した（上図）。発掘はこの対岸から始まり、博物館となったその場所に住居遺跡と碑（下図）がある（2012年8月25日）。この遺跡は上図中央の済南‐徐州間鉄道の拡張工事中1959年に発見された。

物の骨に複雑な彫刻をした独特の器物を携帯する習慣があった。

大汶口文化は後になるほど、隣接地域の影響を受けるようになった。一つは南部で接する良渚文化が山東中部の河川や東海岸を経由して波及した。現在の江蘇省の北辺に近い所に良渚文化の器物を豊富に持つ大墓が出現した。花庁墓地はその例として著名である（高広仁・欒豊実 2004: 159）。第二は、安徽省方面からの影響とみられる環濠を持つ集落が大汶口文化の地域の南東に見られた（高広仁・欒豊実 2004: 149）。安徽省の大汶口文化の蒙城尉遅寺遺跡では稲栽培の遺物の割合が後期に増加していた（高広仁・欒豊実 2004: 189）。これらの影響は、水田稲作民の移動を伴っていたと思われる。アワやキビの農耕に稲作が取り入れられた状況は、前に述べた、河南省中部の賈湖遺跡の例や、屈家嶺文化期に稲作に転換した漢水上流域の事例とも通ずる。

大汶口文化の後期の、紀元前 2500 年頃から、黄河・淮河流域では、乾燥化と海面低下の影響で、湖沼的環境から、大平原が出現し、その比較的高いところに集落が出来たと思われる（高広仁・欒豊実 2004: 192）。この時期から大汶口文化は、その西の河南省東部から中部地域に及んだとみられる（高広仁・欒豊実 2004: 30, 149）。大汶口文化の後期の大集落は見られないが、おそらく次の竜山文化のごく初期の城邑は、大汶口の担い手によるものとみられる。

このような背景のもとに、大汶口文化の精緻な製陶技術から、竜山文化を特徴づける薄手の黒陶が出

現した（高広仁・欒豊実 2004: 80）。こうして大汶口文化は、山東竜山文化に変容したが、それは中原の竜山文化の一つの基礎になった。かつて貝塚茂樹も大汶口文化と山東竜山文化の間に断絶がないと述べた（貝塚 1979: 66）。大汶口人の文化には、東沿海地方に関係する文身（刺青）や豚の下顎の骨を副葬する習俗があった（高広仁・欒豊実 2004）。それはいわゆる東夷の習俗である。伝統的には中原から見て東夷、西戎、北狄、南蛮は未開の族とされたが、実は、大汶口人の西遷は、後世の夏・殷文化にみられる東夷との婚姻関係（夏のところで後述）などの背景として無視できない。

4. 争乱を経て城邑をもつ小国家へ――竜山文化の時代――

中国の新石器時代の区分では、彩陶の仰韶文化とそれに次ぐ黒陶の竜山文化の時代が教科書的に認められてきた。竜山文化の地名は山東省を流れる済河の河畔の竜山鎮に由来する。現在では竜山文化は、銅石併用時代であり、その始まりは、およそ紀元前 2500 年前後とみられている（張江凱・魏峻 2004: 212）。

1975 年に発掘された山東省日照県の東海峪遺跡では、大汶口文化晩期（下層）、大汶口から竜山文化への過渡期（中層）および竜山文化早期（上層）が相互に重なる著名な“三畳圧”（三重の重なり）が発見され、いくつかの土器（鼎、鬶（キ）、高柄杯、小壺、盆等）の形態によって、大汶口文化と竜山文化の継承関係が証明された（高広仁・欒豊実 2004: 81）。

竜山文化の時代は、大汶口文化の後期の説明で触れたように、世界的な気候変動の時代であった。日本での縄文海進期の終わりに相当する。平均値で比べれば、現在の気候と劇的な差異ではないが、気候変動期には、雨量や気温の変動の振幅が大きかっただろう。天水農耕地帯の干ばつや、長江流域の洪水なども頻発したのであろう。仰韶文化の後期に目立った集落がないことから見て、天水農耕地帯の人口は停滞あるいは減少に向かっていた。

大汶口文化の地帯から長江流域、あるいは太湖周辺地域では、水田稲作と漁撈の浸透・改善により人口はある程度増加したと思われる。紀元前 2600 年前後、竜山文化の始まりの時期に、現在の華北平原の南部と黄河－淮河平原は低湿地帯で、ようやく比較的多くの土地が出現し、堌堆とよばれる少し高いところに集落が出来た。その結果、規則的に串のように“堌堆”遺跡が分布した。竜山文化の時期に、この一帯は、文化的に“突然”発達の勢を示した（高広仁・欒豊実 2004: 194）。このような拡大してきた低湿地帯では水稲耕作が最も適しており、それが人口の増加を支えたと思われる。

「大汶口文化人の進出の跡は河南省周口地区に濃厚に認められる。この人文地理学的変遷は、その東部限界が今の北京 - 杭州運河の一線に大体一致している」（呉汝祚 2006）。その東に泰山（1524m）と沂山（1032m）からなる山東山地がある。前述のように、大汶口人が晩期には、西の新しく開けた可住地に移動したことは説明した。稲作の展開には苗代技術などの進歩が寄与したと思われるが、証拠をあげることは難しい。大運河の一部をなす南陽湖の北端にある済寧に山東省の稲作研究所があり（現在は済南に移転）、この地域は山東省の稲作の中心地であった。この一帯で冬期に気温は −10℃まで下がると聞いたが、著者は現地を訪れ、蓮田が拡がっていることを見た。

良渚文化晩期にその地域の衰退が知られていて、それをめぐる 28 の論考を収めた論文集があり（浙江省社会科学院 2006）、気候変動、地域の沈降と海水流入、洪水多発、人口移動（江蘇の北地域へ）あるいは北征、争乱、疫病などが論じられている。マラリアも想像される。争乱の中には勃興しつつあった「夏」による制圧も論じられた。張弛（2003）は、大著の結語でこの良渚地域の一帯の衰退を古代

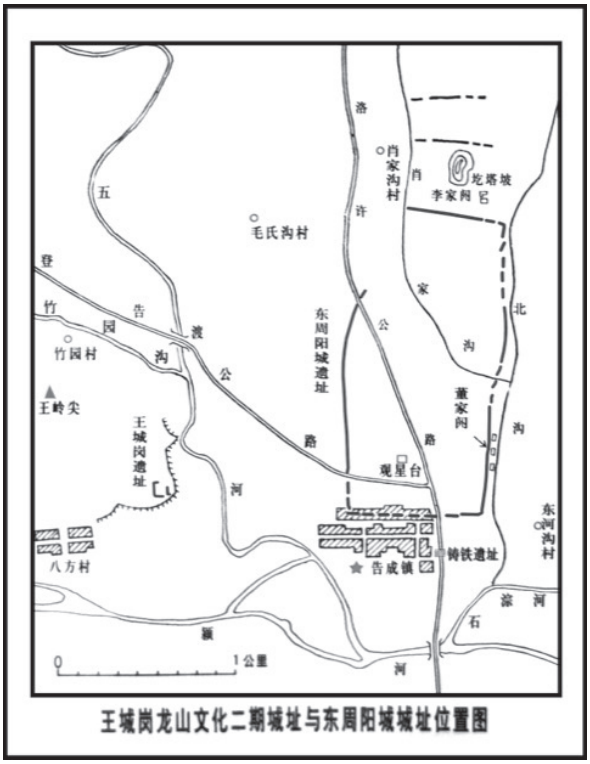

図4　王城崗遺跡の現地案内図と麦畑に覆れた王城崗遺跡の丘陵

案内図下部に淮河上流の穎河、左下半に王城崗遺跡と八芳村の位置が示されている。写真で穎河は遺跡を覆う麦畑の前方木立の背後にあり、右が八方村の集落である（2010年6月7日）。案内図は筆者が撮影した写真を補正。

国家の興隆と関連する争乱によるものと考察した。現在の知見から見ればウイルス病の蔓延なども衰退の原因として考えられるだろう。

竜山文化の時期に天災と人口増加により、各地の拠点であった大集落をめぐって、攻防が激化した。20 世紀の終わり頃からの発掘・調査により、各地に環濠あるいは護城河や城壁に囲まれた居住区画、すなわち城邑が、多くは地域的に連絡のある城邑群として出現したことが認められる。竜山文化の時代の城邑群は、竜山文化の命名由来地である山東省の竜山鎮、河南省の東部の平糧台、河南省の南東部の屈家嶺文化に接した地域、淮河上流域の王城崗竜山文化（図 4)、あるいは殷の安陽の故地に近い後崗文化など、各地にある（張江凱・魏峻 2004)。それらを個別に取り上げる代わりに、ここでは資料が豊富で、竜山文化の頂点を示す陶寺文化の遺跡を一例として取り上げる。

陶寺文化に先行するのは廟底溝二期文化である。廟底溝の遺跡は、河南省西部にある陝県（三門峡の西）の黄河の支流青竜澗の南岸台地上の廟底溝で、1950 年頃から大規模に調査された。その後の研究で、廟底溝二期文化は、東方の大汶口文化の強い影響を受けて、河南省と山西省の接する地域で最初に登場したと考えられる（王小慶 2003: 209）。このような廟底溝二期文化の成立は、前述の山東省の研究者たちの指摘する、大汶口人の西への大移動によってよく理解できる。

廟底溝二期の文化は、竜山文化の時代に小国の様子を見せた、山西省南部の陶寺遺跡へ引き継がれていった（張江凱・魏峻 2004: 228）。この遺跡は、1950 年代に発見され、20 世紀後半まで連続的に調査された。現在、陶寺遺跡と同類の遺跡は、主に汾河下流域の臨汾盆地に分布し、70 箇所に及ぶ。遺跡の面積は一般に数万から 10 余万 m^2 以上、最大は 100 万 m^2 を超過した（張江凱・魏峻 2004）。

2002 年以後の、全中国的な“中華文明探源工程預研究”の結果を踏まえた、呉汝祚（2006）の説明によると、陶寺文化中期に小城址は拡大し、面積約 280 万 m^2 の大城址となった。墓地は遺跡の東南部にあり、墓は 1000 座に及び、明らかに大中小のことなる等級が存在していた。6 座の大型墓はみな木棺葬具を有し、副葬品は非常に豊富であった。また 80 余座の中型墓が発見された。副葬品の組み合わせには差異があり、一般には一、二の彩絵土器と彩絵木器を有し、あるいは精美な玉器と豚の下顎骨等を副葬していた。

陶寺遺跡の大、中、小の墓地やそれらの副葬品の質と数量からみて、社会の貧富の分化がすでに相当顕著になったことがわかる。大型墓中の鼓、磬などの楽器は、当時すでに早期の礼楽制度があったこと示し、これらの墓の主人が“王”あるいは王に近い一級貴族であった可能性を示している。城垣、宮殿、祭祀区、倉庫区からのちに発見された中国最早の“観象台”に至るまで、すべて“王都”級の集落に特徴的な要素が見られ、陶寺がすでに早期文明社会の特徴を持っているとされた（呉汝祚 2006）。陶寺文化の上限年代は約紀元前 2500 年～前 2400 年の間で、陶寺遺址の晩期遺存物の炭素年代からみて、この文化の下限年代と二里頭文化（夏）は基本的に接続し、紀元前 2000 年より遅くはない（呉汝祚 2006）。

上の記述とは別の関連資料では、陶寺文化の住民の生業の記述は見あたらない。陶寺文化の遺跡のあった汾河下流域は、千年以上後の東周時代（BC771 年 –BC256 年）には“三河”地区として、黄河以北・河北省南部および洛陽地区とともに、中国有数の米の産地であった（游修齢 1993: 286）。したがって陶寺文化の時代にも稲作の条件はあったと推察できる。この遺跡の墓地から大汶口文化で盛行した豚の下顎骨の副葬がみられたことは、稲作を取り入れた大汶口文化の「中原」への波及を示すものとして注目すべきであると思われる。

次に竜山文化の銅器についてみると、上述の陶寺文化の遺跡から銅器が出土した。淮河上流域の王城崗竜山文化の西城（図 4）内の大量の遺物の中には青銅片があり、それは銅の鬲（三足のジョッキ）の袋状の足の残片であった。河南省の潁河上流域の新密古城寨でも銅器が出土した。河南東部の平糧台古城では、下層で大汶口の遺物が出たが、晩期には、銅塊が出土した（蘇湲 2007b: 113）。長江中流域に展開した石家河文化の城邑群の中で、1987 年に石家河遺跡の西北部の鄧家湾遺跡の発掘時に石家河文化期の堆積中から相当多くの銅塊と銅渣が出土した。分析鑑定により、これらの銅塊はすべて「黄銅」に属した（張江凱・魏峻 2004: 247）。なお、黄銅は銅と亜鉛の合金でいわゆる真鍮であり、青銅は銅と錫の合金である。

竜山文化の城邑の中には、戦乱の跡を示すところがある。陶寺文化の遺跡でも戦乱の後を示す遺骨が出土した。初期国家の起源は、無政府的な部族国家の争乱を収拾することにあったとみられる。有力な城邑を盟主とする部族が、最初の王朝である夏の都を淮河上流域に建てたと思われる。太湖周辺の良渚

文化の地域は、新石器時代の文化の極点に達していたが、やや閉鎖的な環境にあり、大量の銅鏃を駆使するような新勢力に駆逐されたのであろう。

葉文憲（2006）によると、大規模な人の移動の結果として、新石器時代の終わりまで各地で続いた文化が、竜山文化の時代に断絶したことは一般的にみられるとし、各地域の例を挙げている。ここではそのうち二例を引用する。第一に、山東竜山文化は、土器製作技術などで先進的であり、両城鎮などの多くの遺跡からは、青銅錐と製錬銅滓が発見されている。しかし、竜山文化の後山東地区で出現した岳石文化は、生産技術の水準と社会発展の面では明らかな退歩を示し、竜山文化との間には文化上の断層が存在している。第二に、良渚文化を継いで太湖地区には馬橋文化が出現した。しかしこの両者の文化の性格は完全に異なる。前者は大量の玉器を有し、無銅器であり、後者は少しの銅器を有するがほとんど玉器を持たない。前者の石器は磨いて光沢を得たが、後者の石器はかなり粗造である。良渚文化最晩の炭素 14 年代は BP4200 ± 145 年であり、馬橋文化最早の炭素 14 年代は BP3730 ± 150 年で、両者の差は 500 年ほどである。馬橋文化層は良渚文化層の上に重なっているが、多くの遺跡で両文化層の間に一層の泥土層がある。

教科書の上では文明の発展を前提として各文化の前後関係の記述に力点が置かれるが、自然的あるいは社会的要因から、上述のように各文化の衰退や断絶が随所にあったことは注目される。

5. 洛陽平原に展開した最初の王朝――夏王朝――

中国の最初の王朝「夏」については、『史記』に伝承の一部が採用されているだけで、長い間その実在は疑われてきた。一般に無文字社会の伝承は、音曲をつけて専門の集団にうたい継がれてきた。誰でも経験するように、曲をつけた歌の文句はよく覚えられる。ギリシャのトロイ戦争の故事は、紀元前 13、4 世紀のことであるが、数百年歌い継がれて最後に古典ギリシャ語に記述された。その伝承をたよりにトロイの遺跡が発掘された。夏王朝の事績も歌い継がれて、後世に古代の歴史として『尚書』に記述されたと推定される。『尚書』は秦の始皇帝の「焚書坑儒」の難にあったが、隠匿によって一部が後世に伝えられた。

『史記』の殷に関する記述の信頼性は、20 世紀の初めに甲骨文字の研究で確かめられた。それを受けて夏王朝の伝承をたよりに、夏の始祖禹の城が探索された。前世紀の終わりから今世紀にかけて、黄河とは低い分水嶺を隔てて流れる潁河上流の河畔、登封市の王城崗（図 4）で、竜山文化の大城が発掘された。その前後に同じ潁河上流域の新密市でも古城と新砦の遺跡が発見された。それより早く 1960 年頃から洛陽郊外の二里頭で、大量の遺物とともに、夏の宮殿とみられる遺跡が発掘・調査された（図 5）。ここは、下流で黄河に合流する、伊・洛二河の合流点に近く、舟運の要所であり、洪水の危険もあったが、東へ嵩山のふもとの峠を越えて登封に出ると、潁河のほとりの竜山時代の大城のあった王城崗（図 4）に通じている。この洛陽一帯は東周時代にも、米の生産が豊富であった（游修齢 1993: 286）。

二里頭の遺跡の年代は、各分野の専門家を組織した国家的な研究で炭素年代を利用して、BC1750 年～ BC1520 年と見積もられた。一方で伝承による夏王朝の通算期間が 471 年とされていた。従って、二里頭以前の夏王朝の宮殿は別の場所にあったと考えられた。伝承から王城崗の大城が有力とされてきたが、現在は新密市の新砦の遺跡が有力視されている。しかし、炭素年代による二里頭遺跡の年代と、それ以前の王都とされる遺跡の年代を合わせて、伝承の 471 年に収まるかどうかは複雑な問題で容易に決められない（岡村 2007）。

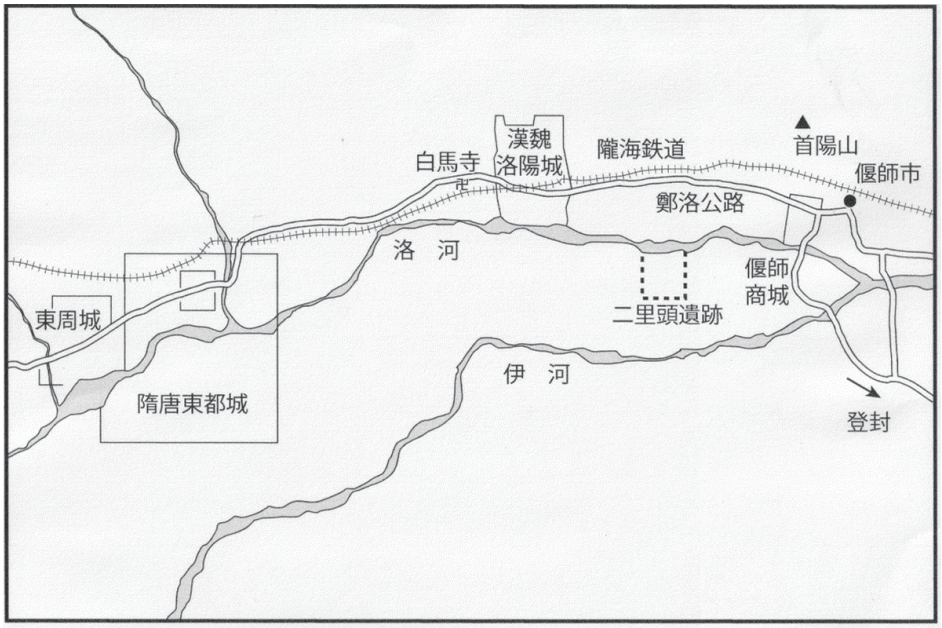

図5　二里頭遺跡と偃師商城

杜金鵬（2003: 72）より改写と追加。

伝承によると夏の王、禹は伝説の聖帝舜の後に、治水の功績により推挙されて帝位についた。禹は重臣の益に位を譲ったが、益は禹の子啓に譲位し、世襲王朝が始まった。伝承では、禹の孫の太康が夏の都を登封から、伊河・洛河のほとりの斟尋（シンジン）（二里頭）（図 5）へ遷した。啓の子の太康の時から「後四十年」の反乱が続き、禹の玄孫の少康が王位を回復した。反乱の間、夏の王家は、妃の実家の有仍（ユウニョウ）氏など、河南と山東の境界域の東夷圏の有力者の庇護を受けて生き延びた（蘇湲 2007a: 45）。伝承によると禹の就位式の場所の涂（ト）山（今の安徽省北部懐遠県）は淮河中流域にあり、妃の出身や、王孫の亡命中の庇護者を見ても、夏王朝は、淮河圏の首領たちとの連盟によって維持されたとみられる。二里頭の夏の遺跡の発掘で、当時馬がなかったことが確認された（許宏 2009）。夏王朝は広い領域を直接統治する機動力を持たなかったとみられる。

夏の盟邦の首長や、夏と婚姻関係のあった部族には、「有」の付く人名が見られる（藤堂 1976: 157）。斟尋という地名も、斟は淵を意味する名詞で、尋は形容詞である。英語の定冠詞にあたる、有という一種の冠詞や、名詞のあとに形容詞をつけることも、タイ語系との関連を示している（藤堂 1976: 156）。古代の淮河下流域の部族はタイ語系であったと見ることができる（池橋 2005: 134）。タイ語で稲は Khao であり、これは漢字の「禾」に通じ、現在でも貴州から広西に及ぶ広い地域の稲作民の言葉はタイ語系である。禹は最晩年、会稽（紹興）に諸侯を集めたと云われ、その伝説の墓は紹興にある。紹興は、良渚文化の栄えた地域の近くにある。

二里頭の遺跡からの出土穀物中で、稲はアワについで多く、1/3 を占めたという記録がある（許宏 2009）。この地域は低湿地帯が多く、稲作が当時重要であったと考えられる。なお、この遺跡に隣接して、偃師で商（殷）の城が発掘された（図 5）。これは夏王国の遺民を監視する城とみられたが、その祭祀場の跡から豚や牛の骨とともに大量の炭化米も出土した。

夏は、中原の最初の王朝であったが、東夷諸部族とタイ語系稲作民の背景を留めている。また夏の玉

器や台付の皿（豆）や酒器など礼器の祖形は、良渚文化あるいは大汶口文化に遡ることができる。儀式の器物につけられた饕餮（トウテツ）紋は良渚文化に由来したものである（朱金坤 2010a: 203）。饕餮紋の由来や意義については古来諸説あったが、それが良渚文化に遡ることは興味深い発見と思われる。

夏の盟邦の殷（商）は、夏に服属する諸侯であったが、勢力を蓄えて、夏王朝の桀を巣湖（安徽省）近くに追放して王朝を建てた。紀元前 1500 年頃のことである。夏の亡国の伝承には、東夷諸国の離反および本拠地の洛河と伊河の干ばつがある（蘇湲 2007a: 89）。気候の変動による農業不振と東夷諸国の支持を失って、夏は滅びたといえるだろう。なお二里頭の遺跡では大規模な争乱の跡は見られていないようだ。

結 語

ここではおよそ紀元前 2000 年頃の夏王朝の成立までの歴史を概観し、天水農耕の地域への稲作の波及をたどってみた。大局的に見るとそこには二つの流れがある。第一には、長江中流域の稲作を基礎とする屈家嶺文化あるいは石家河文化の地域から、漢水上流域や仰韶文化の栄えた河南省の西南部への稲作の波及である。第二には、長江下流域で長期に続いた稲作を基礎に、良渚文化の小国まで連なる文化の中心があって、それが山東地域の文化であった大汶口文化と接触し、それを通じて淮河中・下流域へ稲作が波及した。そこはいわゆる東夷の地域であり、気候変動による低湿地帯での可住地の拡大とともに、竜山文化の城邑が各地に出来た。その中で盟主となったのが、夏王朝とみられる。その文化には、玉の生産、器物の意匠、あるいは饕餮文などに見られるように、良渚文化に由来し、大汶口文化の発展で波及した遺産がみられる。

夏の次の殷の中・後期には、金属器の大規模な生産、車馬の使用あるいは文字の発明によって、いわゆる「黄河文明」が開花する。これらの過程において、明瞭な証拠を連ねることは容易ではないが、低湿地で生産性の高い稲作の天水農耕地域への波及が、人口増加を支え、古代の王朝の成立にいたる重要な要因であったと考えることができる。したがって、「黄河文明」といえば、キビやアワの天水農耕と結びつける見方は改める必要があろう。

およそ 2 世紀前に、アダム・スミスは「国富論」で地代の検討を行い、稲作はほかのどの作物の栽培と比べても収益が高いことに注目した（スミス 1959）。スミスの挙げた稲作の地域は示されていないが、邦訳の『諸国民の富』第 1 編第 11 章に、Carolina の地名が見え、「良好な米田は四季をつうじて沼地であり、しかもその一季には、水におおわれた沼地である」との記述がある。そこはアメリカ稲作の始まりの地の一つである。スミスの着眼点は、現在でも十分理解されているといえないが、中国の歴史における天水農耕地帯への稲作の波及の理解にも有用である。この理解は、アフリカなどを含む今後の農業開発の上で稲作の農業上の潜在力を活用する上でも必要であろう。

謝 辞

著者は、『稲作の起源』を出版する前後に、中国の歴史における稲作の役割を理解するために、2000 年からの 15 年ほどの間、中国各地を訪ねて廻った。そのために多くの知友の協力を得た。それに対して深く謝意を表する。彼らの助力により、九牛の一毛とはいえ、中国の農業地理について、理解を深め

ることができた。本ノートの刊行にあたり、責任編集者と 2 名の査読者から懇切なご指摘を頂き、元の原稿の誤字などの多くの欠陥を軽減できた。このことについて深く謝意を表する。

引用文献

アンダーソン（1950）『黄土地帯』（松崎寿和訳、原著 J. G. Andersson, *Children of the Yellow Earth*, 1932）、学生社。
杜金鵬（2003）『偃師商城初探』北京：中国社会科学出版社。
高広仁・欒豊実（2004）『大汶口文化』北京：文物出版社。
原田幹（2009）「良渚文化「耘田器」の使用痕と機能」『金大考古』64: 8–12.
河南博物院編著（2009）『河南博物院修訂版』北京：文物出版社。
黄強（1996）「中国稲作遺跡と古代稲作文化」諏訪春雄・川村湊編『アジア稲作文化と日本』pp. 35–64、雄山閣。
Huang, Xuehui et al. (2012) A map of rice genome variation reveals the origin of cultivated rice. *Nature*, 490: 497–501.
池橋宏（2005）『稲作の起源』（選書メチエ）講談社。
池橋宏（2019）「殷の稲作について――甲骨文字の再検討から浮かぶ水稲の重要性――」『農耕の技術と文化』28: 19–24.
貝塚茂樹（1979）『中国古代再発見』（岩波新書黄版）岩波書店。
岡村秀典（2007）『夏王朝――中国文明の原像――』（講談社学術文庫 1829）講談社。
スミス、アダム（1959）『諸国民の富』（大内兵衛・松川七郎訳）岩波文庫。
蘇湲（2007a）『華夏城邦――追踪夏商文化探索者足跡』北京：清華大学出版社。
蘇湲（2007b）『黄帝時代――索中華文明起源之謎』北京：清華大学出版社。
藤堂明保（1976）『漢字と文化』徳間書店。
王小慶（2003）『仰韶文化の研究――黄河中流域の関中地区を中心に――』雄山閣。
呉妙燊主編（1990）『野生稲資源研究論文選編』北京：中国科学技術出版社。
呉汝祚（2006）「初探良渚文化衰落的原因」浙江省社会科学院国際良渚文化研究中心編『良渚文化探秘』pp.324-337、北京：人民出版社。
許宏（2009）『最早的中国』北京：科学出版社。
葉文憲（2006）「距今 4000 年前後的象和良渚文化的北遷及其帰宿」浙江省社会科学院国際良渚文化研究中心編『良渚文化探秘』pp.145–161、北京：人民出版社。
游修齢（1993）「歴史上的中国北方稲作」游修齢『稲作史論集』pp.285–303、北京：中国農業科技出版社。
游修齢・曽雄生（2010）『中国稲作文化史』上海：人民出版社。
張江凱・魏峻（2004）『新石器時代考古』北京：文物出版社。
張弛（2003）『長江中下游地区史前聚落研究』北京：文物出版社。
浙江省社会科学院国際良渚文化研究中心編（2006）『良渚文化探秘』北京：人民出版社。
朱金坤 総主編（2010a）『湮滅的古国故都――良渚遺址概論』（主筆：趙曄、余杭歴史文化研究叢書・良渚文化③）杭州：西冷印社出版社。
朱金坤 総主編（2010b）『飯稲衣麻――良渚人的衣食文化』（主筆：兪為潔、余杭歴史文化研究叢書・良渚文化⑤）杭州：西冷印社出版社。